

「地域防災セミナー」活動報告3

保健・医療・福祉・地域のネットワークづくり

神戸市 東灘区社会福祉協議会 地域福祉ネットワークカー 鎌田 あかね 氏

(1) 東灘区地域ケアネットワーク会議の取り組み

皆様、こんにちは。東灘区社会福祉協議会の鎌田と申します。東灘区でどのように保健・医療・福祉・地域のネットワークづくりを行ったか、なぜネットワークが必要なのかという話をさせていただきます。

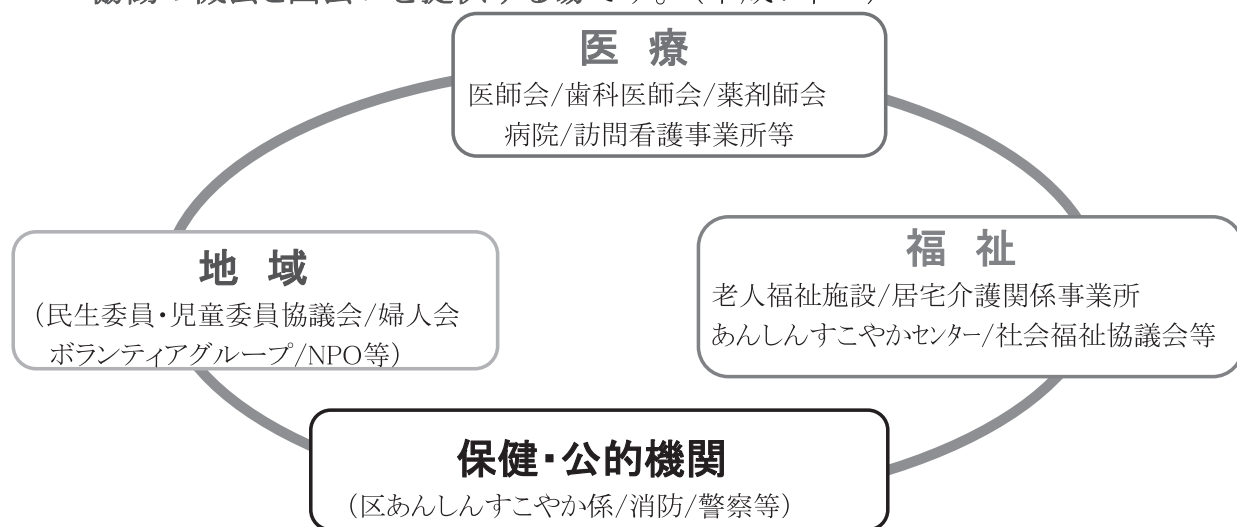
現在、介護保険改正で言われているものとはまったく異なるのですが、それ以前の介護保険が始まる前の震災後に、高齢者等の要援護者の地域ケアの充実、促進を図るために、各団体と施設等が集まってそれぞれの課題を抽出して、どのように解決していくかを考える場として、地域ケアネットワーク会議を開催していました。

もともとは社会福祉協議会が主になって立ち上げたのですが、現在は、区の保健福祉部健康福祉課主催で開催しています。医師会等の医療関係、福祉のさまざまな施設、地域の民生委員や婦人会、ボランティアグループ等と、役所、消防、警察等の公的機関がメンバーとなり、一緒になってさまざまなテーマについて話をしていました。



東灘区地域ケアネットワーク会議

高齢者など要援護者のための地域ケアの促進や充実を目標に各団体、事業所、施設など、各々で構成するネットワークで活かせる学びや協働の機会と出会いを提供する場です。(平成7年～)



企画・実施: 地域ケアネットワーク会議実行委員会
事 務 局: 東灘区保健福祉部健康福祉課あんしんすこやか係

(2) 災害時の地域ネットワークについて (平成24年度)

平成24年度、平成25年度には、災害時の要援護者についてもっとしっかり考えていこうということで、このようなテーマで取り組むことになりました。誰に頼もうかというときに、同志社大学の立木先生の記事を読み、「これしかない」と思い、2年間、全体のコーディネートをお願いしました。

始めは、福祉の視点から災害時のネットワークを考えようと思いました。この会は、前段は講座ですが、後半では必ず構成メンバーによるグループワークを行います。それぞれの立場で考えていること、困っていることを出し合ってもらい、多職種の人同士が常に話をする状況を作っています。医師会の先生から話を聞いたりしますが、泥様にきていただいて、「当事者の発信が大事」というお話もお聞きしました。

資料に、参加者からの感想を記載しています。「防災の意識を高めるためには、個人ではなく人と人とのつながりを強めることが大切だと感じました」や、福祉施設関係者から「地域の障がい者の方達とひとつになった元気なまちづくりのための潤滑油になりたい」という感想が出されました。

24年度

災害時の地域ネットワーク

災害時の要援護者へのサポートについて情報や問題点を共有し、ネットワークづくりが深められる継続的な取り組みを提案していく。

①5/18(金) オリエンテーション

②7/27(金) 先駆的事例をさく！その1
ゲスト:同志社大学社会学部教授 立木茂雄氏
「福祉の視点から災害時の ネットワークを考えよう！」
「公・共・私」支援型アプローチを

作業を通し、皆で考えることができた。災害に備えることと、地域関係の大切さを感じた。

当事者の同意=決定を得ておくこと。個人情報の保護と活動のバランスについて良く理解できた。

違う立場で災害のことを考えても必要となってくることはいくつかのカテゴリーに絞られることを再認識できた。

①個人情報を把握すること
 ②普段からの人間関係づくり
 ③自分の組織内の役割分担
 ④避難経路と方法を知ること
 ⑤組織間の役割分担や連携を考える
 ⑥個別支援の方法を考えること
 ⑦マニュアル作成
 ⑧犯罪の防止
 ⑨地域のマップづくり

③9/21(金) 先駆的事例をさく！その2
ゲスト:東灘区医師会 会長 長坂肇氏
「医療の視点から 災害を考える」

阪神淡路大震災を踏まえた検証
災害に対する心構え
☆避難所(家の近くの避難所を知っておく)
☆持っていくもの
(代替が利かない自分にとって大事な物)
⇒常用している薬(病院から処方された薬)
入れ歯、メガネ、補聴器など

生きていくための防災対策
→ともに生きていく近所付き合い
減災は人の手、あなたの手で

防災の意識を高めるためには、個人ではなく人と人との繋がりを強めることが大切だと感じました。

“上下関係のない地域”という言葉が印象的でした。

地域の障がい者の方達と一つになった元気なまちづくりのための潤滑油になりたい！

④11/16(金) 関係機関の 意見をさく！
ゲスト:兵庫区障害者自立支援協議会・防災を考える部会
泥 可久氏
「障害者の視点から災害を考える～兵庫区の場合～」

- ・誰もが集まれる場所がある地域
- ・住んでいる人の顔が見える地域
- ・ご近所付き合いが普段からできる明るい地域
- ・地域砂漠の中のアオアシのような
- ・障害者が楽しく働くことができ子どもの声がよく聞こえ、さりげなく支援し合える地域

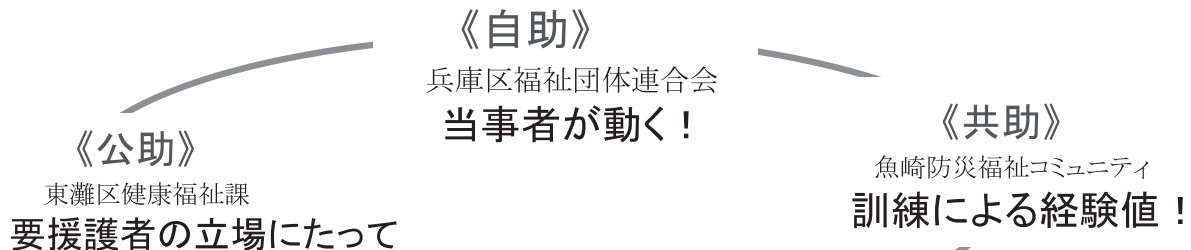
出所：鎌田あかね氏講演資料

⑤ 地域ケアネットワーク会議 交流集会

ゲスト:同志社大学社会学部教授 立木茂雄氏

講話「東日本大震災から見えてきたこと」

パネルディスカッション「避難所を考えてみよう」～日頃の活動の中から～



支援者と当事者(要援護者)が出会える、関わり合いの場が必要。招き招かれ...お互いの顔が見える関係づくりの場を！



パネルディスカッションの内容を踏まえ、私の属する施設なら、私の立場なら、何をする必要があるのかを考えるきっかけになったように思います。一番印象に残っているのは、「本人にまず話をしてから支援する。本人の能力を奪わない。」...いろいろな場面で大切にしていきたいことだと思います。

(老人福祉施設関係)



出所：鎌田あかね氏講演資料

年度の最後には大きな交流集会ということで、自助、共助、公助の各代表にお話をいただき、ネットワークを組んで頑張っていこうという確認を行いました。老人福祉施設関係者のご意見も記載していますが、「本人にまず話をしてから支援する。いろいろなことをいろいろな場面で大切にしていきたい」等、さまざまな気づきをしていただく機会になりました。「支援者と当事者が出会える、関わり合いの場が必要。招き招かれ...お互いの顔が見える関係づくりの場を」ということで、先ほど、泥様のお話で「face to face」というお話がありましたが、当事者だけでなく、医療関係者、専門職、地域の方に、それぞれどうすれば気づいてもらえるかが大事です。皆様に主体的に動いていただくためには、自分で気づき、意識して取り組んでいこうと思ってもらえることが必要です。われわれは、それをどのようにしてもっていけばよいかという仕掛け人として、考えるための材料としてグループワークのお題を設定したり、説明いただく方々に課題提起をしていただきました。

(3) 要援護者支援のネットワークをひろげる・ふかめる・たかめる(平成25年度)

平成25年度は、そのネットワークをいかに深めて高めていくかということで取り組みました。ここでも、皆様の気づきがいろいろあります。2年目は東灘区の当事者に登壇していただくということで、東灘区の障がい者にお話ししていただきました。その時に、障がい者の方から、「あのことを振り返るのは大変辛かったので、私は今まで封印して、誰にも伝えていませんでしたが、これを機に封印を解きました」と言っていたことが、私も大変衝撃的でした。このような機会を作ることで、本人の気持ちが高まる可能性があります。その声によって、当事者発信をどのように作るかを、改めて考えさせられました。

泥様が言われたように、「避難所なんかに行っても、私たちがいるところではなかったから」というのが、第1声でした。別の自立支援協議会場で、「避難所生活のことを、当事者発信でもっとしっかり考えませんか」というお話をしましたが、その時にも、当事者グループの声としてあったのが、「行ったところで、私たちがいるところはない」ということでした。いかに地域の人に一緒に考える場を提供できていなかったかを反省し、われわれが、どのようにすれば地域の人に伝えることができるかを考えました。地域と当事者の意識の違いの差をいかにして埋めていくかが、今でも一番の課題です。

当事者でも自己発信する人はごく一部です。当事者と話していると、「行政や地域の人がしてくれて当たり前。意識してくれるはず」という話が出てきます。一方、地域は、「われわれも一生懸命やっているが、障がい者から言ってもらわなくては、何を助ければよいかわからない」と言います。この差をどのようにして埋めていくかです。ケア会議の中でも、先生のお話から3つの輪が大変大事ということで、それぞれがそれぞれの強みと弱みをしっかり理解したうえで、どのようにネットワークを組んでいくかということを考える機会になりました。

最後の回では、DIG（災害図上訓練）を行いました。最初は、何をするのかという雰囲気でしたが、やっていくうちに盛り

25年度

要援護者支援のネットワークを ひろげる・ふかめる・たかめる

「災害時の地域ネットワーク」をもっと深め、より具体的な取り組みにつながる機会に

①5/17(金) オリエンテーション 同じ職種、立場でふかめるグループワーク 「災害時、わたしたちだからできること」

《災害が起きた直後の場面で》

- ・安否確認、状況把握
- ・事業所内の連絡体制の確認、情報収集

《避難場所生活の場面で》

- ・避難場所や経路の確認
- ・地域とのネットワークづくり、地域との交流や日頃からの情報交換
- ・事業所内の連絡網、災害時のマニュアルづくり、利用者情報の一覧表づくり

普段から顔の見える関係づくりを...
いつ始めるの？

今でしょ！！

いろいろな団体の意見を聞いて
「なるほど、これが連携か！」と
学ぶことができました。

施設で避難訓練をしていたとしても、災害時となると実際に確認しておくべき点はまだたくさんあることやつながりの大切さがよくわかりました。

②7/26(金) 当事者の話をきく

「当事者からの声を受けて、どんな支援に結びつけるのか・・・」

東灘区聴覚言語障害者福祉協会 会長 夜久幸男さん
神戸市重心父母の会 東灘支部 支部長 武田純子さん
神戸市手をつなぐ育成会 東灘支部 近藤真由美さん

阪神淡路大震災を経験して

自分たちができる支援を考える

障がい者が必要なスペースや備品を把握し、避難所運営に反映させる。
介護など専門職ならではの支援が出来る(入浴介助等) 等

大切なこと、建前でなく本音が聞けた。

日頃から障がい者の行動を理解し、接し方や配慮の必要性を地域の方を巻き込んで一緒に勉強していきたい。

③9/27(金)

ゲスト:同志社大学社会学部教授 立木茂雄氏

「福祉の視点から災害時の ネットワークを考えよう！」

みんながつながり、
みんなの力を活かす！

【当事者】
自分のことを知っている
当事者同士のネットワーク

【支援者(専門職)】
専門的な知識(個のチカラ)
連携・チームワーク
(チームのチカラ)

【地域団体】
地域のことを一番よく知っている
地域住民間のネットワークを持っている。

④ 地域ケアネットワーク会議 交流集会

ゲスト:同志社大学社会学部教授 立木茂雄氏

講話 「避難移動のその後 ～福祉避難所って?～」

グループワーク DIG(災害図上訓練)

(1)福祉避難所運営の事前準備の必要性

(2)桃生福祉避難所の事例

医療、看護、介護、リハビリ、社会福祉、
一般ボランティアなどの多職種連携チーム
によるケアやサービス（多角的な支援）

(3)災害ケースマネジメントの必要性

一般避難所においても「公平な」サービス
と「公正な」サービスのバランスを

『DIG』（災害図上訓練）

各地域の地図上に透明のシートを敷き、その上から
ハザードマップを参考に、土砂災害、河川氾濫、津
波などの影響を受ける区域を地図に色分けして落
とす。ここは危険！避難所までは行きづらい(階段や急な
坂道、狭い道等々)をマーク！どんな風に危ないのか？マークをすることで避難
所によっては、浸水や土砂災害に合う可能性の高
い箇所があることが判明！物理的に可能と思われるオリジナルの(福祉)避難
所を提案してみよう！
「どのハザードにもかからない処」、「車が停められ
るとイイね!」等々たくさんの意見が出てきました。

出所：鎌田あかね氏講演資料

上がり、自分たちで本当によく考えていました。同じ地域の防災福祉コミュニティの方や、施設の方、ボランティアグループ、民生委員・児童委員が、同じテーブルで、自分の地域について、どのように避難すればよいかを地図をもとに細かく話をする機会になりました。「多職種の中で話ができたため、納得できた」、「“連携の形”を学んだ」、「自分の地域に関係することだけでなく、他の地域の人との連携や関係づくりも日頃から大切だと思った」等の話が出ました。われわれができることとして、さまざまな立場の方々が話をして気づいてもらえる機会を作ること、自分のこと、相手のこと、つながること、今自分自身が何をすべきかにいかに気がついて、考えてもらえるか、あくまでも主体的にどのように関わってもらえるかというしかけや啓発をどのようにしていくかが大事なことでと考えています。

(4) その後の取り組み事例「じどうかん発 乳幼児親子・防災を学ぶ」

平成24～25年度までの取り組みを踏まえて、実際にどのような活動をしたかですが、児童館では、「乳幼児親子・防災を学ぶ」というものを行いました。神戸市には中学校区にひとつ児童館があります。その中で、社会福祉協議会が運営している児童館では、「自分にあった防災グッズを整えておく」という自助の部分や、さまざまなシミュレーションを行ったり、

その後・・・1

うおっこぼうさいがっこう ～世界一受けたい防災授業～



出所：鎌田あかね氏講演資料

避難所にある粉ミルクの使い方を知っていただくことを、年に1～2回行っていました。魚崎児童館では、防災福祉コミュニティの人に来ていただいております。今回は、乳幼児のお母さんが学ぶ機会を作りました。「うおっこぼうさいがっこう ～世界一受けたい防災授業」というタイトルで、楽しみながら親子で学んでいただくものです。防災福祉コミュニティの方に、まるバツクイズを出していただきました。少し難しい言葉もあったため、子どもよりお母さんの方が一生懸命答えていました。また、非常食の紹介もしました。非常食の持ち出し編ということで、魚崎では、「水が何リットル以上」等と言われているので、実際にその水が入ったリュックを3歳の子どもが背負ってみるという体験をしました。他に見学等を行いました。

これは、地域の方と乳幼児のお母さんが知り合うきっかけになりました。この効果として防災福祉コミュニティの方がいつも言われるのは、「避難訓練はいつも同じ人しか来ませんでしたが、これを機会に乳幼児の親子が避難訓練に参加するようになった」ということで、今では、乳幼児親子も地域の一員として活動を始めています。

(5) その後の取り組み事例「施設発信！ 避難することを一緒に考えて！」

「ぶどうの木」は、津波が来たら90分以内に国道2号線より上に逃げなければならないという海沿いの施設で、重度の身体障がい者が多く、ほとんど電動車椅子や通常の車椅子の方々です。解決策は、「地域の人に相談しよう」ということで、津波対策意見交換会を、施設発信で防災福祉コミュニティ等の地域の人に声を掛け、一緒に考える会を開催しました。このときに、事前に施設には、「自分たちでできることを整理しておいてください。そのうえで、この部分については、自分たちだけではどうしようもならないので、地域の人に一緒に考えてほしいと働きかけなければ、地域の人もすべてのことはできない

い」という話をしておきました。

職員が実際に歩いて波の遡上や高低差を考えて、どれが自分たちにとってもっともよいルートなのかを検討しました。それをもとに、地域の人も一緒に歩きました。市が決めた避難ルートは、高低差が少なく波がすぐに来てしまうので、自分たちで異なるルートを考えました。車椅子で段差をうまく超えられなかったり、線路を渡っていると、車輪がはまってしまう等があるため、実際に歩いてみて、安全なルートを探したということです。すると、地域の方から、「われわれの近くにも車椅子の高齢者がいるので、そのルートの方がよい。途中で皆さんのお手伝いもできる」という話が出てきました。

また、神戸市では、民生委員・児童委員が見守り台帳を作っています。それをもとに、自分たちの地域の中で、単身高齢者、高齢者のみの世帯などの身体的に厳しい方々がどこに住んでおられるかをマッピングしています。しかし、今はその情報共有はできないため、いざというときにらせるようにしておいてくださいという形で準備を進めていただいています。

以上で、東灘区の活動報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

災害時の避難ルートの確認風景



出所：鎌田あかね氏講演資料

東灘区地域ケアネットワーク会議



出所：鎌田あかね氏講演資料